薄桃色のメモリー

いとかなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
薄桃色のメモリー

【Ｎコード】
Ｎ３８６４Ｉ

【作者名】
いとかなし

【あらすじ】
満開の桜が舞う中で、彼に出会った――。
恋人もおらず、ただ機械的に毎日を過ごしているＯＬ、住友彩香。
そんな彼女の前に、初恋の面影を思わせる男性が現れた。
奥手で自分から行動出来ない彩香は、変わりたいとは願っても、
それぞれ建て前や世間体、相手を思いやる気持ちなどが邪魔し、
一筋縄にはいかない、大人の事情を抱えている。

自分を変えたいと願う女性の、ほろ苦い大人のラブ・ストーリー。

1、忘れかけていた、懐かしい風

四月――。満開の桜が舞う中で、彼に出会った。
機械的な暮らしから一変、私は無垢な子供の頃にタイムスリップしたように、輝きを取り戻していた。

「新人研修を担当する、住友彩香（すみともあやか）さんです」
上司からそんな紹介を受け、私は機械的にお辞儀をした。でも、目だけは一人の男性から離すことが出来ない。
うちの会社はアパレル関係で、世間的に知名度も上がってきた。企画、デザインを手がけ、オリジナルブランドを持つまでに成長している。
二十七歳の私は、新人研修を任されることになっていた。
事前に資料をもらっていたが、彼の名前はない。直前に上司のコネで起用されたのだと、後で知った。
思い耽った私を起こすかのように、突風とともに開いた窓から桜の花びらが舞い込んだ。
私は何事もなかったかのように、口を開く。
「では、軽くでいいので自己紹介をお願いします」
私は上から目線を気取って、新人たちにそう促した。
新卒の新人たちは、初々しく自己紹介をしていく。最後に、彼の番になった。
「梶直宏（かじなおひろ）です。転職組ですが、新人として扱ってくださって結構です。よろしくお願いします！」
九名の新人のうち、彼だけは違った。
新卒に混じって、彼だけは年が違う。着慣れたスーツ、ネクタイの締め方、そして左手の薬指に輝く、銀色の指輪。
彼の面影は、忘れかけた私の思い出を優しく撫でた。

「野本直宏（のもとなおひろ）です。よろしくお願いします！」
私が小学校四年生の春、その人は私のクラスにやってきた。後にその転校生が、私の初恋の人となる。
その日は風が強くて、満開の桜が吹雪のように舞っていたのを、今でも思い出す。
「ノモチン、サッカーしようぜ」
あっという間にクラスに溶け込んだ転校生は、もっぱら男子と外で遊んでいた。成績はわからないけれど、スポーツは優秀で、運動会ではエースだったため、女子にも人気があった。
「ねえ、消しゴム貸してくれん？」
彼が私に初めて言ったその言葉は、彼が転校してきて一か月も後のことだった。
「い、いいよ」
すでになんとなく気になっていた存在から声をかけられ、私は頬を染めた。
その後、彼と何度か他愛もない話をしたが、これといって一緒の思い出はない。でも、私はいつしか彼のことが好きになっていた。

私は会社から帰ると、久しぶりに小学校の卒業アルバムを開いた。でも、彼の姿はない。それもそのはず、彼は転校してきた次の年に、また別の地へ転校していったからである。
仲の良かった男子や、彼を好きだった女子の数人は連絡を取り合っているようだったが、私はそんな性格でもなかったし、たまに入る風の噂だけで、もう会うことはないんだと、初恋に終止符を打った。
「あ……」
アルバムのとあるページを見て、私は思わず声に出した。
運動会の写真に彼の姿。当時の私が貼ったのであろう、ハートマークのシールがそこに貼られている。
「やっぱり似てる……」

核心は得られないものの、私は今日出会った彼が初恋の相手だと感じていた。

2、ベテラン新入社員

「へえ。梶さん、前の会社ではデザインされてたんですか」
次の日の昼、社員食堂に入るなり、私はそんなことを耳にした。
見ると新入社員たちが、彼と食事をしている。いや、新入社員同士でというのが普通かもしれない。
「あ、住友先輩。よかったら一緒にどうですか？」
新入社員の分際で……とも思ったが、そう声をかけたのは彼本人である。ほかの新入社員たちは、教育係の私を遠ざけているに違いない。
「先輩だなんて……同い年じゃないですか」
私は苦笑しながらも、そうアピールした。
資料をもらっている私は、彼らの年齢や出身校くらいは知っている。
「え、そうなんですか？　下手したら僕のが年上かと思いました」
彼は天使のような笑顔でそう言った。
「彩香。どうしたの？」
その時、後ろからそんな声が聞こえ、私は振り向いた。
そこには同期の女子社員、倉内裕子（くらうちゆうこ）がいる。大の仲良しだ。
「裕子……ううん、一緒に食べよう」
「うん」
嫌な雰囲気を作ったかもしれないと思いながらも、私は裕子と別のテーブルに着いた。
ちらりと彼のほうを見ると、特に気に留めた様子もなく、新入社員たちと笑い合っている。
「どう？　新入社員の研修」
裕子に言われ、私は我に返った。
「ああ……まあ順調。でもずるいよ、私だけそんな役ついちゃって……」

「でも私は今度、嫌な出張させられるよ？」
「どっちがいいんだか悪いんだか」
「そうね。あ、ねえ。たまには飲みに行かない？」
裕子の提案に、私は一も二もなく頷いた。
「いいね。じゃあ終わったら、いつものところね」
「了解」
昼食が終わると、新人研修に戻る。
仕事のこなし方、電話の取り方、物の場所、書類の書き方、果てしないほど初歩的な作業だが、まだ半人前の彼らには重要なことだ。
彼はというと、特に話すこともない。だが転職組というだけあって、経験は豊富らしく、他の人より教えることが少ないのは事実だ。でも、特別扱いはしない。

「おつかれ。乾杯！」
仕事が終わるなり、私は裕子とともに近くの居酒屋へ向かった。二人で飲む時は大抵ここだ。
裕子は社内でもモテる女子社員の一人だが、今はお互いに恋人もおらず、ただ会社の愚痴を言い合って過ごす。
恋愛に関しては、今は話す恋バナもない。仕事漬けの毎日で出会いもないし、社内に適当な男性は見当たらない。
だから社員たちは新入社員に期待しているが、まだ今のところ、新入社員の人気や不人気は耳にしない。
「それで、新入社員はどんな感じ？　可愛い男の子いる？」
裕子が目を輝かせて言うが、私はそんな淡い期待を裏切って首を振った。
「ぜーんぜん」
「嘘。私見たんだから。イケメン君」
「ええ？　誰だろう……」
私は裕子の趣味と照らし合わせながら、新入社員たちの顔を思い出す。

裕子は年上も年下もオールオッケーの人で、恋多き女でもある。出会いのないうちの会社の中でも、別の部署の年下社員、取引先の年上男性など、噂に事欠かない。だが最近は忙しく、恋人がいないのは知っている。
「ほら。リーダーっぽい、年上にも見える彼」
その言葉に、一瞬で彼の顔が浮かんだ。
「ええ！　あの人？」
「なによ、いいじゃん。それに彼でしょ？　社長に引き抜かれたっていう、凄腕さん」
それを聞いて、私は目を見開いた。
「ええ！　そうなの？」
「有名な話じゃない。教育係なのに知らないの？」
「上司のコネで入ったとは、ちらっと聞いたけど……」
「ああ、私は噂で聞いたんだ。教育係にはちゃんと言えなかったのかもね。ベテランなのに新人研修受けさせてるし。でも、将来は重役ポストも約束されてるんじゃないかって、もっぱらの噂だよ」
「へえ……特別扱いしないでとは言われてるけど」
私は聞きなれない噂話から除外されていたことに気がついた。少し寂しく感じる。
「まあとにかく、彼はいいでしょ。将来も期待出来るし！」
「でも、あの人結婚してるみたいよ？」
「嘘！」
一瞬で望みがなくなった相手と知った、あまりの裕子の驚きように、私は苦笑してしまった。
こんなくだらない恋バナも、よくあることではある。
「本当。左手の薬指に指輪してたもん」
「ああ、玉砕……一瞬の恋だったわ。まあでも、不倫もアリかな」
「裕子！」
「冗談、冗談」
私たちは冗談とも本気とも取れない話を続けながら、飲み続けた。

数時間後、ふらふらになりながらも、私は裕子と分かれ、自宅へと戻った。
都内の小さなマンションだが、一人暮らしにはちょうどいい。
私は帰るなりシャワーを浴びて、明日の支度を始めて気が付いた。
「あ、そうだ。コンビニ行かなきゃ……」
最近忙しくて、買い物する暇もない。
買い置きのストッキングがもうなかったことと、冷蔵庫に食糧が何もないことに気付いて、そのまま家を出て行った。
女といえど、真夜中に近いこんな時間、ジャージで歩いていても気にならない自分がいる。特にこのコンビニには、同じようなラフな姿の女性が何人かいた。
「もう一杯やろっかな……」
酒コーナーでビールを見つけ、私はカゴに六本入りのビールを詰めた。その他、つまみを少々、女性雑誌、目当てのストッキングなど。こんな姿、知り合いには見せられない――。
「住友さん？」
漫画のようにビクッと震えて、私は静かに振り向いた。
声でもしやと思ったが、そこには今、一番会いたくない人がいた。
彼、である。

3、初恋の人

そこには今、一番会いたくない人がいた。彼、である。
「やっぱり住友さん！　こんばんは。家、近くなんですか？」
バツの悪い私に反して、彼はいつもの笑顔でそう言った。
私には、それが逆に切なく感じた。
「ああ……はい」
どもりながら、私は答える。
「よかったら家まで送りますよ。こんな時間に、女性が一人じゃ危ないですよ」
「そんなこと言って、梶さんが危ないかも……」
どうしたことか、そんな憎まれ口を叩いてしまった。
だが彼は驚いた顔をした後、またすぐに笑顔に戻った。
「あはは、確かにそうかもしれないですね。でも大丈夫です。僕には愛する妻がいますんで。もちろん、よかったらですけど……」
彼は薬指の指輪を見せながら、そう言う。
私は静かに頷いて、彼とともにコンビニから出て行った。
「あの……僕のこと、嫌いですか？」
帰り際、突然彼がそう言ったので、私は驚いて彼を見た。
「え？」
「いやなんか、避けられてる気がして……」
そう言う彼も、ストレート過ぎる質問に、すまなそうにしている。
「嫌いじゃ、ないですよ……」
私は、そう言うのが精一杯だった。
「そうですか。それはよかった……変なこと聞いてすみません」
彼のその言葉の後、私たちは無言のまま時を過ごした。
昔からそうだが、好意がある人にはうまくしゃべれない自分がいる。克服したいと思っても、それはどうにもなっていない。
「あの！」

そんな自分に嫌気が差して、私は思い切って声にした。お酒がまだ抜けていないせいもある。
「あの、東高下台小学校にいたことはありませんか？」
突然の質問に、彼は驚いた顔をした。だが、すぐに思い出そうと、空を見つめる。
「さあ……僕の家、転勤家族で、子供の頃は何度転校したかわからないんですよね……」
「そうですか……変なこと聞いてすみません」
すっかり意気消沈して、私は黙り込んだ。
私たちは沈黙に戻って、家へと進んでいく。
「もしかして……校門のすぐそばに、小便小僧がいる学校？」
突然、彼が自信なさげにそう言った。
私は思わず、大きく頷く。
「そう！　確かにそう！」
「じゃあ、池の噴水部分が鯉の口になってる学校だ」
「うん、そう！」
「歴代校長の写真が、廊下に飾ってある！」
「そう、そこ！」
私たちは、少年少女時代の笑顔に戻っていた。
「じゃあ、もしかして……」
彼の目は、懐かしさに輝いている。
私は小さく頷いた。
「小学校四年の時に、同じクラスだった……」
私の言葉に、彼は白い歯を見せて笑う。
「なんだ、早く言ってよ！　全然気付かなかった」
「だ、だって、すぐいなくなっちゃったし……それに、苗字も違うし」
私は少しむきになって、口を開いた。
「ああ、親が再婚したからね……でもそうか、こんなところで昔の同級生に再会するとは思わなかったよ。そうか、あの学校の……」

「……覚えてる？　うちの学校」
「覚えてるよ。さっき言ったことにしても、何かと変な学校だったもん。でも、すぐにみんな迎えてくれて居心地が良かったし、楽しかった。人に関しては、悪いけど全然覚えてないけどね……まあ、高校や大学の時のクラスメイトも、仲の良い男友達以外は全然覚えてないくらい」
「いいの。私、地味なタイプだし、梶君とも全然しゃべったことないもん」
「そっか……でも、これも何かの縁だね。これから同じ職場な者同士、よろしくお願いします！」
彼はそう言って、深々と頭を下げた。
「こちらこそ」
私は素直さを取り戻し、そう答える。
その時、二人同時にくしゃみをしてしまった。
「あははは。少し冷えてきたね」
彼が言う。その声はいつも明るく、陽だまりのように暖かい。
すっかり路上に立ち止まって話し込んでいた私たちは、懐かしい話に終止符を打ち、とりあえずまた歩き始めた。
「家、どのへん？」
彼が言った。私は前を指差す。
「この先の道、右に曲がったところ……もういいよ。夜出歩くのも慣れてるし。早く帰ってあげないと、奥さん心配するんじゃないの？」
「うん……でも送るよ。どうせ僕の家もこっちだし」
彼の言葉に甘え、私はマンションの下まで送ってもらった。
「ありがとう。なんか、みっともない姿晒しまして……」
「あはは。人のこと言えないよ。僕なんて、家の中じゃパンツ一丁……いやいや、では先輩。また明日」
「もう。先輩はやめてください」
「でも新人だから……じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみなさい……」
彼は私の姿が見えなくなるまで見送ってくれた。
部屋に戻るなり、私は嬉しさに顔を綻ばせ、開いたままの卒業アルバムに貼られた、ハートマークをなぞる。
「嬉しいな……」
小学校の頃、ろくに話も出来なかった彼と出会えたこと、わかりあえたこと、何もかも満足だった。
でも、この初恋が実ることはない――。
彼には奥さんがいるし、私の現在抱えている気持ちは、恋ではないはずだから。
なにより、私はこれ以上ないという幸せで温かい気持ちになっていた。

4、会いたいと想う気持ち

次の日。酒も抜けて冷静さを取り戻し、私は余計に彼に会うことが恥ずかしく感じるようになっていた。どんな顔をすればいいのかわからない。

「おはようございます」

そんな気持ちをよそに、相変わらずの優しい声が聞こえた。

振り向くと、そこには彼がいる。

「おはよう、ございます……」

私はどもってそう答えた。

「おはようございます、住友さん。昨日はどうも」

先輩からさん付けに代わり、彼の笑顔はいつになく優しく輝いて見える。

「こちらこそ……」

今、思い出しても恥ずかしかった。

ジャージ姿で酒臭くて、更に酒とつまみを買っているような女を、彼はどう思ったことだろう。奥さんと比べられたりしたんだろうか……そう考えると、ここから逃げ出したかった。

だが、彼の笑顔は変わらず優しい。

「あの、よかったら今度、一緒に食事でもしない？　昔話もいろいろしたいし」

「あ、うん。ぜひ……」

「よかった。じゃあ、また声掛けさせてもらいます……」

緊張した私に触発され、彼も緊張したかのように、そう言って去っていった。

「なによ、抜けがけ？」

そこに、裕子が声をかけてきたので、私はハッとした。

「裕子」

「なんかいい感じ？　誰よ、奥さんいるって忠告したの。あんたも

彼狙いなわけ？」
「馬鹿言わないでよ」
私は苦笑することしか出来ない。
「でも、普段奥手なあなたが、そんなに楽しそうに男と話すのかしらー？」
すっかりからかわれ、私は裕子に彼との経緯を話した。

「へえ、同級生だったんだ？」
昼、一緒に食堂で食事をしながら、裕子が興味深げにそう言った。
「うん。こっちもびっくりで……」
「でもよく覚えてたね。私なんて、転校生どころか、クラスメイトほとんど覚えてないよ」
「そりゃあ、私だって全員覚えてるわけじゃないよ」
「あ、もしかして！　初恋の人とか？」
ズバリを言われて、私は飲んでいたお茶でむせ返ってしまった。
「ああ、ごめん。でもその反応！　彩香、わかりやすいなあ」
「違うよ！」
「何が違うのよ。でもまあ、やめときなさい。結婚してるんでしょ？　彼」
私たちはくだらない恋バナから、冷静に戻った。
昨日と逆の立場で同じことを言う裕子に、私は苦笑する。
「最初からわかってるわよ。初恋なんて実らないものだもん……あの頃だって、連絡先も聞かずだったし。今更会ったからって、恋には発展しないよ」
「まあ、あんたは普通の恋愛求めてるもんね。浮気とか考えられなそう」
「うん。それは考えられない……」
私は苦笑しながらも、目は食堂の隅で新入社員たちとしゃべっている、彼の姿を追い続けていた。
認めたくはなかった――が、気になっている。それでも忘れなけ

ればならないと言い聞かせた。
事実、結婚している彼を奪おうという気はなかった。浮気など考えられない。
それでも少し、気になっていた。

その日は彼と二人きりになる機会も、話す機会もなかった。
もう一度、小学生の頃に戻って、昔話に花を咲かせたいという気持ちでいっぱいになったが、帰りを待ち合わせる関係でもなければ、待っているのもおかしい。
私は今日会うのは諦め、一人、家路を帰っていった。
「二十三時か……」
今日やるすべてのことを終え、私はソファに寝そべりながら、時計を見上げて呟く。
ふと昨日のことを思い出し、コンビニに行きたくなった。
彼に会えるかもしれない――。
夜中のハイテンションも手伝って、得体の知れない期待感が私を支配する。奥さんがいる人とわかっていても、自分がこんなに諦めの悪い女だとは思わなかった。
「よし！」
私は着替えて家を飛び出した。もうジャージ姿など見せられはしない。
コンビニに着くと、いつもの店員にいつもの客と、特に代わり映えしない店内だった。
「お仕事帰りですか？」
すっかり顔なじみになった若い女性の店員に、そう尋ねられた。きっと私がジャージでないからだろう。
私は苦笑して首を振る。
「ううん。ちょっと買い出し」
そう言って、私は店内へと入り、雑誌コーナーやお菓子売り場を何度も往復し、彼を待った。

待ったといっても、もちろん待ち合わせしているわけでもない。
それどころか携帯番号すら知らない関係に、私は私をストーカーと重ね、苦笑した。
「あれ、いた……」
突然、近くでそんな声がしたので、私は驚いて振り向いた。
もう諦めかけていたので、余計に驚いたのだ。
「か、梶くん！」
そこには、求めていた彼の姿があった。

5、深夜のコンビニ

そこには、求めていた彼の姿があった。
「毎日いるの？　もしやとは思ったんだけど」
彼も驚きながらそう言って、苦笑する。
スーツ姿の彼は、今日はまだ一度も家に帰っていないようだ。
「毎日じゃないわよ。でも私も、もしやと思って……」
正直に言った私に、彼は無邪気に笑った。
「今日はジャージじゃないんだね」
「もう！　いつもジャージじゃないわよ」
見え見えの嘘をつきながら、私は素直に嬉しさを感じていた。
そんな私に、彼も温かい眼差しを向けてくれている。
「駄目だよ、こんな時間に女の子が出歩いちゃ」
「もう女の子じゃないわよ。梶くんは、まだ帰ってなかったの？」
「ああ、うん。昨日もだけど、社長と今後のプラン練ってて……」
仕事の話題に我に返り、私は彼を見つめる。
「あ……噂聞いたよ。社長に引き抜かれたって……」
正直に、私は噂話を言った。
彼は困ったように笑う。
「引き抜かれたわけじゃないよ。確かに社長は、前の会社時代から知ってるけど……そんなんじゃない」
誠実に答える彼は、子供時代から変わらない。
直接話したことはなくても、彼が明るくて誠実だったことは知っている。だからみんなに好かれていたのだ。そして、私からも――。
「帰ろうか」
自然にそう言う彼に頷き、私たちはコンビニを出て行った。
「今日は私が送るよ」
突然、私はそう切り出した。
彼は驚いたように首を振る。

「いいよ。住友さんの家のが近いんだし」
「でも、私も知りたいもん。私は家知られてるのに、フェアじゃないわ」
私の言葉に折れたように、彼は頷いた。
「わかったよ。でも、帰り襲われないようにね」
「大丈夫。この辺り、明るくて治安もいいし」
私たちは、当たり前のように歩き出す。
「……うちの会社には慣れた？」
沈黙になる前に、私はそう尋ねた。
先輩という立場を利用すれば、普段は奥手の私でも、すらすらと言葉が出てくる。
「うん、だいぶ。やっぱり新人研修受けてよかったよ。前の会社とは規模も違うし、同期もいいやつばっかだし」
「そっか。でも、新人なのに社長と飲みに行ってるなんて、聞いたらうちの上司も真っ青だよ」
冗談めかして言った言葉だが、彼は一瞬、口をつぐんだ。
「……まあ、引き抜かれたわけじゃないにしろ、社長のコネで入ったのは事実だからね。何言われても仕方がないけど……」
やがてそう言った彼は、どこか寂しそうだった。
「ここが、うち」
私のマンションを越えてしばらく行ったところで、彼が一軒家を指差して言った。
「すごい！　一軒家」
思わず私はそう言った。
しかし玄関は真っ暗で、閉め切った雨戸に、家の中にあるはずの温もりは感じられない。
「奥さんの実家に住まわせてもらってるだけだよ。そのご両親も、もう亡くなったけどね……」
「そうなんだ。でも新しいよね」
「子供が生まれてからリフォームしたからね。おかげで、ローンで

首が回らないよ」
私は少し衝撃を受けていた。
当たり前のことかもしれないが、奥さんがいるだけでなく、子供までいたとは知らなかったからだ。
でも私の心を知る由もなく、彼の笑顔は優しいままだ。また、その顔は私にとって、癒しであり、そして輝いて見える。
「お茶でも、と言いたいところなんだけど……」
「あ、いいです、そんな。帰るから」
彼の言葉に、私は慌てて拒否をした。奥さんに会う勇気など、まだない。
「そう。本当に一人で大丈夫？　やっぱり送ろうか？」
優しい彼の言葉が沁みる。でも、私は続けて首を振った。
「ううん、平気。じゃあ、また明日」
「あ、うん……あのさ、近いうち話がいくと思うけど、新人研修が終わったら、僕と住友さん、デザイナーとして組むと思う」
言いにくそうに切り出した彼の言葉に、私は驚きと嬉しさを感じた。
「本当？」
「うん。さっき社長と話してて。住友さんさえよければなんだけど……」
「いいよ、もちろん！　何のデザイン？」
「子供服らしいよ」
「わあ、遂にうちも子供服ブランド立ち上げるのね。俄然やる気出てきた。いい話をありがとう！」
私はそう言ってお辞儀をした。
きっと彼が社長に私を推薦してくれたんだと思った。そう思いたかった。
彼にとって、うちの会社で知っている人は私以外にほとんどいないはずだから、当然といえば当然だけど、素直に嬉しい。
「こちらこそ、よろしく」

勢い余った様子の私にも、彼は笑顔を向けてくれる。
「うん。じゃあ、おやすみなさい」
「おやすみ……気を付けて」
彼に見送られ、私は意気揚々と自分の家へ帰っていった。

それから数日後、一週間の新人研修が終わり、新人はバラバラの部署に配属された。そこから更に、部署別の研修が待っている。
彼はもちろん、私と同じデザイン部署である。そして彼に言われた通り、私は彼と組んで、オリジナルブランドでの子供服のデザインを担当することになった。

6、天国と地獄

「今日は家でデザイン考えるから、コンビニには行けないからね」
仕事の合間、彼がこっそりとそう言った。
私たちはあれから、深夜のコンビニデートをするようになっている。
もうお互いの電話番号やメールアドレスも交換したが、特に待ち合わせもしていないのに、決まった時間にあのコンビニへ行くのが日課となっていたのだ。
「もう。別に約束してるわけじゃないんだから」
そう言ったものの、私は残念だった。でも、そう断ってくれた彼が、やっぱり好きだとも思う。
最近、彼への思いが日増しに強くなっていることに気付いている。だが、先のことが怖いので、無意識に消そうとも思っているようだ。
しかし不思議なことに、彼から奥さんの話を聞いたことはなかった。でも、聞けば答えてくれるし、いつも持ち歩いている奥さんの写真も見たことがある。また、五歳になるという娘さんの写真も見ていた。

「娘の……真奈ちゃん、どんな服が好きなの？」
二人でデザイン画を見つめながら、何の気なしに私は尋ねた。
だが、彼は難しい顔で天井を見上げる。
「うーん……そう聞かれると、好み知らないんだよな」
「ええ？　父親なのに」
「うん……でも、やっぱりピンクとかフリフリとか好きだったよ」
「あはは。なんで過去形……」
「昔から仕事で遅くなっててあんまり会えなかったし、今はよく知らないんだ」
苦笑してそう言う彼に、私は一つの答えが浮かんだ。

もしかして、奥さんとは別居中なのかもしれない。離婚調停中なのかもしれない。ならば、すべてに納得がいく。
淡い期待と辻褄が合う勝手な妄想に、私は一人、首を振った。
馬鹿なこと考えるのはやめよう――。
私は仕事に戻った。

その夜、私は“行けない”という彼の言葉を理解しながらも、日課となったコンビニに足を運んだ。
「今日は彼、まだ来てないですよ」
いつもの店員が、嬉しそうにそう言ってきた。うざったいのと嬉しいのとで、私は苦笑する。
「ありがとう。でも、今日は……」
そう言いかけた時、彼の顔が見えた。照れ臭そうに笑っている。
私は店員から逃げるように、彼のもとへと駆け寄った。
「どうして？」
「いや、なんか……家で仕事してたんだけど、気分転換っていうのかな……それに住友さん、待ってるような気がして……」
しどろもどろで彼が言った。
期待してもいいですか――。思わず私は、叫びたくなった。
「……奥さんとは、うまくいってるの？」
帰り道、私は思わずそう尋ねてしまった。すぐに後悔して、続けて口を開く。
「あ、ごめんなさい。こんなプライベートなこと聞かれたくないよね。でも……毎日遅くに出歩いて大丈夫なのかなって、ちょっと心配で……」
卑怯な言い訳だったが、私はそう続けた。
「……うちは比較的、自由な家だから……」
静かに微笑んだまま、彼はそう口にした。でもそれ以上、何も語ろうとはしない。
いつものように家まで送ってもらったが、私は少しギクシャクし

てしまった関係に後悔した。
でも、彼の心の広さはすでに知っている。明日はきっといつもの笑顔に戻ってくれる、そう信じたい。
そして私の中に、一つの決意が生まれた。
「この仕事がうまくいったら……」
この仕事が終わったら、彼に告白しよう――。
奥さんがいようと、子供がいようと、もう関係ない。とはいえ、彼から笑顔を奪うことは絶対に嫌だし、家族から奪おうなんて思わない。
でももし、私の妄想が少しでも当たっていて、彼が幸せでないなら、別居中ならば、離婚調停中ならば、私に僅かでも望みがなるならば……私は彼との幸せを夢見たい、そう思った。

次の日、私は昨日のギクシャクした雰囲気を払拭するように、明るく彼に声をかけた。
「おはよう！」
だが彼はどこか元気なく、いつもの様子ではない。
「ああ、おはよう……」
「どうしたの？」
私のせいということはわかっていたが、そう尋ねる。
すると、彼はいつものように静かな微笑みを返してきた。
「べつに、なんでもないよ」
「でも……あ、そうだ。今日、どっか飲みに行かない？」
私から男性を誘うことなど初めてだ。もちろん、彼ともまだ飲みに行ったことがない。
「ごめん。今日も家で仕事するから。コンビニにも行けない……というか、もう夜会うのやめよう」
突然の拒否に、私は自分の犯した過ちを後悔せざるを得なかった。

7、ギクシャクした関係

「ごめん。今日も家で仕事するから。コンビニにも行けない……というか、もう夜会うのやめよう」
突然の拒否に、私は自分の犯した過ちを後悔せざるを得なかった。
「……ごめんなさい。奥さんに……何か言われたの？」
「違うよ。うちのはそんなこと言わないし……でも付き合ってるわけじゃないんだし、やっぱおかしいでしょ。仕事で疲れて帰って来てるのに、また出るのもしんどいしね。じゃあ僕、部長に呼ばれてるから行くよ」
いつもの笑顔に戻って、彼はそう言って去っていく。
まるで私から解放されてほっとしたかのような笑顔に、絶望を感じた。

それから彼の笑顔は戻ったが、私たちの関係は遠くなった。
私がいくら深夜のコンビニで待っていても、彼が現れることはない。会社で会うだけの、仕事の関係だ。
そんな生活に慣れつつも、私の秘かな恋心は、まだ息衝いている。
彼は前の会社で培ったノウハウを生かし、社長だけでなく、部長や他の上司に可愛がられる存在となり、私なんかすぐに追い越されそうだ。
焦りもあるが、彼がやり手というのは、一緒に組んですぐに気付いたし、一緒に働けることで今は満足している。

「よし、全部ゴーサインだ！」
この日は記念すべき日となった。私と彼とで作った何着もの子供服デザインに、遂にゴーサインが出た。これから更に生地などの打ち合わせを重ねなければならないが、私たちの仕事は一段落ついたことになる。順調にいけば、来年の春物から店頭に並ぶだろう。

半年掛かりでデザインに没頭した私たちにとって、一番報われた日となったことは明白である。
「おつかれさま。やったね」
変わらぬ笑顔で、彼が私に微笑む。
「うん。おつかれさま」
私も笑顔で応えた。
「よし、今日は記念すべき日だ。子供服ブランドは初めてだからね。どうだ、二人とも。飲みに行かないか？」
部長の誘いに、私は彼を見つめた。
彼は困ったように俯いている。
「あの……」
「なんだ、都合が悪いのか？　梶」
「すみません。今日は娘の誕生日で……」
その言葉に、私は胸を貫かれた。彼が妻子持ちということを、どこかで忘れようとしていた自分がいたからだ。だがそれも、彼の一言で簡単に蘇った。
「そうか。そりゃあ駄目だな」
「すみません……」
「いいんだ。まだ小さいんだろう？　今日は早く帰ってやれ。飲み会なんていつでも出来るんだからな」
いつもは強引に誘う部長も、やり手の彼に、そして小さな娘という事実に同情したのか、優しい言葉をかけている。
「すみません。今度ぜひ連れて行ってください」
「ああ。住友さんは大丈夫なんだろう？」
矛先を自分に向けられ、私は思わず歯を食いしばった。
「え……」
「なんだ、その態度は。たまには上司と部下、飲み合おうじゃないか。仲の良い子……倉内さんとか誘えばいいじゃない」
裕子の名が出てきて、私は苦笑した。部長の目当ては裕子らしい。人気のある裕子なら仕方がないけれど。

「彼女に聞いてからにしてください。それに今度、梶君の都合がいい日に延期でもいいじゃないですか。部長、飲みたいだけでしょう？」
「住友さんは冷たいなあ。たまにはいいじゃない」
私は苦笑しながら、部長と漫才のような会話を繰り広げ、その場を盛り上げるのに必死だった。
あとで彼が、私にすまなそうにしているのを見かけたが、咎める理由はまったくないので、笑顔で応えておいた。

幸せな家庭を想像するのは簡単だ。彼を思い浮かべれば、すぐに見える。それが妬ましいという気持ちは、不思議となかった。
それはたぶん、彼のことが大好きだからだ。彼からあの笑顔を、もう奪いたくはない。
「ケーキ……は用意してるよね。おもちゃとか迷惑かな……」
裕子の都合が悪いということで、部長との飲み会はなしになった今日、仕事からも解放された私は、駅ビルに入っているおもちゃ屋で、無意識に彼の娘さんへの誕生日プレゼントを探していた。

結局、流行りのぬいぐるみを買ってしまった私だが、行き場もなくデパートをうろうろして家路へ向かった。
今日渡さねば意味がないという衝動と、後日渡せばいい、大事な日に知らない私が行ってはいけないというブレーキがかかって、私は行き場を失くしていた。
だが、とりあえず彼の家の様子を見ようと、彼の家へと向かってみる。
彼の家は相変わらず雨戸を閉め切っていて、中の様子を窺い知ることは出来ない。
「どうしようかな……」
不審者のように、私は彼の家の前で、ぐるぐると考え込んでいた。
「梶さんなら、さっき出かけましたよ」

その時、買い物帰りの様子である中年女性がそう言った。
私は我に返り、その女性を見つめる。
「えっ」
「一時間ほど前に帰って、またすぐに出かけられましたよ」
女性は隣の家の門に手をかけている。彼とも面識があるようだ。
「あ、それはわざわざご丁寧に……それで、ご家族で出掛けられたんですか？」
「え？　あ、ああ……」
途端、女性は明らかに顔を曇らせ、顔を伏せた。
私は思わず、女性に詰め寄る。
「教えてください！　彼は……彼の奥さんと娘さんは、本当にこの家で暮らしてるんですか？」
そう言った私に、女性は何度も瞬きをして、言葉に詰まっている。
「あ、あなたは……？」
女性に言われ、私は慌てて女性から離れた。
「あの、会社の者です。彼と同じ職場で……」
本当のことだったが、どもってしまって嘘っぽくなってしまった。だが、真剣なことは伝わったようで、女性は大きな溜息をついて頷いた。
「一周忌ですよ、今日……ちょうど一年前に、事故で……娘さんの誕生日で、家族で外食する予定だったらしいです。旦那さんは仕事で遅れて、一人だけ助かったとか。奥さん子供含め、奥さんのご両親もみんな……」

8、彼が背負っていたもの

「一周忌ですよ、今日……ちょうど一年前に、事故で……娘さんの誕生日で、家族で外食する予定だったらしいです。旦那さんは仕事で遅れて、一人だけ助かったとか。奥さん子供含め、奥さんのご両親もみんな……」

頭が真っ白になって、声も出ない。

予想をはるかに上回る衝撃の事実に、私はふらっと後ずさる。すると誰かに当たり、驚いて振り向いた。

するとそこには、彼がいた――。

「あ、嫌だわ。この人がどうしてもって言うもんだから、私……失礼しますね」

バツが悪くなったのか、女性は隣の家へと足早に入っていった。

私も出来ることなら逃げたい。だが彼は、いつになく無表情のまま、私を見つめている。いや、私は目に入っているだろうが、それは遠く、まるで私を見ているとは思えない。

「……うち、来る？」

やがて、彼がそう言った。だが私の返事を聞くこともなく、彼は自分の家へと向かう。

私はどうしようか迷った。得体の知れない怖さが、今の彼にはある。もしかしたら殺されるかもしれないと思った。だけど怖いもの見たさもある。そして真実が知りたい、彼を一人にしたくないとも思った。

私は、彼に続いた。

「お邪魔します……」

すでに家に上がった彼に続き、私はそう言いながら家の中を見渡す。案外綺麗になっていて、家族がいてもおかしくない。

私は彼が入っていったリビングへと向かった。

「適当に座って」

何かを吹っ切ったように、そこにはいつもの彼がいた。
「あの、お邪魔します……」
ダイニングテーブルの一角に、私は座った。
彼はやかんに火をかけ、シンクに寄り掛かっている。
「……それで、何の用？」
やはり普段とは違う様子で、彼が尋ねた。
私は口をつぐむものの、持っていた紙袋をテーブルに置く。
「あの……プレゼント買ったの。今日渡そうかどうしようか迷ったんだけど、一応、様子だけでも見て行こうと思って。そしたら隣の方が声をかけてくださって……」
「あの人、噂好きだから……」
彼は苦笑して、やかんの火を止め、お茶を入れて差し出した。
「どうぞ」
「ありがとう……」
お茶を置きながら、彼は私の前に座る。それだけで緊張が走る。
「……聞いた通りだよ。一年前の今日、僕は世界で一番大切な人を失った。それだけだ」
悲しく微笑む彼をも、私には輝いて見えた。
なんと声を掛ければいいのかわからない。ただ真実を知ってしまったことが申し訳なく、今までの行動にも悔い、そして彼に同情の思いを寄せる。
言葉は見つからなかったが、ここで黙っていても申し訳ない。まとまらない頭を奮い起こし、私は口を開いた。
「ごめんなさい……私ずっと、違う想像してた。梶君、家族のこと大事にしてそうなのに、あんまり話さないから、別居でもしてるのかなって……でも、言いにくいには当たり前だよね。今までいっぱい傷付けてごめんね……」
泣きたい気持ちを抑え、私は静かにそう言った。ここで私が泣いてしまえば、彼の行き場はなくなるだろう。
「……一年前のあの日、家族は仕事で遅い僕を迎えに来ようとして

たんだ……あの子の誕生日だったのに、僕は少し残業して……乗っていた車は、居眠り運転のトラックに追突された。車はペシャンコで、見る影もなかった」

虚ろな目で語る彼の言葉を、私は無言のまま耳を傾ける。

「何もやる気が起きなかったけど、一人でいたら気が狂いそうだったから、休みも取らずに働いたよ。でも周囲の同情の目が辛くて、心無い言葉が怖くて、僕は会社を辞めた……本当は、この家にいるのも辛いんだ。でも、家族で過ごした名残もある。いっそ死にたいと思っていたある日、今の社長が声をかけてくれたんだ。どうやら前の社長が頼み込んでくれたらしい。僕も、新しい会社ならやっていけると思った。僕のことなんか誰も知らない場所なら、うまく……」

私は思わず、彼の手を握った。

「本当にごめんね。でも、私はこれを知っても何ともならないよ。そりゃあ言葉は悪いけど、可哀想だと思う……でもそれ以上に、私はあなたが好き」

自然と出てきた言葉だった。私は堰を切ったように言葉を続ける。

「そう、好きなの……今回の仕事が終わったら言おうと思ってた。あなたに家族がいようといなかろうと、好き。でも、あなたが大切にしているものを壊そうとは思わない。あなたが幸せならそれでいいと思った……でももし、あなたが幸せじゃなくて、大きな傷を抱えていて、私なんかでも少しでも力になれるなら……そばに置いてほしいの」

初めての告白だったが、不思議と言葉がすらすらと出てくる。

彼は複雑な表情を浮かべ、やがて苦笑した。

「うざいよ」

その一言で、私は殴られたかのような衝撃を受けた。

9、自分の殻

「うざいよ」
その一言で、私は殴られたかのような衝撃を受けた。
「え……」
「うざい。でも……ありがとう」
真逆の言葉に、私の目から涙が流れた。緊張が少し解れたのだ。
彼は立ち上がると、私の前に跪き、私の手を取る。
「この半年、僕がこの家に帰っても苦痛じゃなかったのは、社長が飲みに誘って気遣ってくれるのもあったけど、住友さんがいたっていうことは明白だよ」
その言葉だけで十分だった。
私は止まらない涙を堪えようと必死だったが、彼に手を握られているので、どうすることも出来ない。
「うっ、ううっ。ごめんね。泣いちゃって、ごめんね……」
鼻水や涙を流し、私は声にならない声でそう言った。
彼の顔は、もはや涙で見えなかったが、ぼんやりと微笑んで見える。
「学生時代の恋愛みたいに、なんだかわくわくして楽しかった。でもやっぱり考えてみると、僕は妻も子供も忘れられないし、新しい恋愛に踏み切る勇気もない。住友さんのことは好きだけど、それは友達としてだ。友達にしてはずいぶん助けられたと思うけど、本当に出会えてよかった」
まるで別れの挨拶のように、彼は話を続ける。
「本当にありがとう……」
「もういいよ……なんか、別れの挨拶みたい……」
私はやっと彼の手から解放され、涙を拭ってそう言った。
目の前の彼は、相変わらず複雑な表情を浮かべながら、真っ直ぐに私を捉えている。

「うん。お別れなんだ……来月から、九州に行く」
「えっ」
またも衝撃の言葉に、私は今度こそ倒れそうになった。
だが、私の意識を支えるように、彼は口を開く。
「今回の仕事が終わったらって、前々から決めてたんだ。やっぱりこの家が辛くて、どこか新しい土地で働けないかって、社長に相談して見つけたんだ。今度こそ誰も知らない場所、新しい仕事で頑張るつもり……」
「私がいたから？　梶君のこと、少しでも知ってる私がいたから？」
私の言葉に困ったように、彼は眉を顰める。
「違うよ……でも、住友さんを見てると辛い」
その言葉の真意もわからず、私は彼の家を後にした。
そこからの記憶はほとんどない。ショックで何の言葉も出なかった。

それから月末までの数日間、私たちの生活が変わることはなかった。
それよりも、組んでいた仕事が終わったため、同じ部署にいても別々の仕事を手がけるようになり、話す機会すらない。もっとも、機会があったとしても、何を話せばいいのか、どんな顔をして会えばいいのか、まったくわからない。

「何があったの？」
夜、私は久々に裕子と飲んでいた。
さっきまでうちの部署の連中で、別の店で飲んでいた。彼の送別会である。
彼は今日で仕事を辞め、数日後には九州へ行くという。小学校の時のように、あまりにも突然で、引き止める関係でもない。きっとこのまま何もしないだろう。
気落ちしている私を、裕子は心配してくれているが、彼がどんな

傷を抱えているかなど言えはしない。
「何って、べつに……」
「べつにじゃないでしょ。そんなに落ち込んでんのに」
「……そりゃあ落ち込むよ。急に遠い所へ行っちゃうし、フラれたし……」
口を尖らせて言った私に、裕子は目を開かせている。
「へえ。まさかと思ったけど、フラれたんだ。っていうか、告白したんだ。妻子持ちによくやった！　褒めてあげる」
妻子持ちということを否定はしたくない。彼にとっては、今も大切な家族なのだから。それを忘れてなどとは言えるはずがない。
「ありがとう……でも初めて告白したけど、フラれるって辛いね……」
「何言ってんだか。振るほうはもっと辛いんだからね」
モテる裕子ならではの言葉だ。羨ましく思える。
「はあ……」
「もう、元気出してよ。どっちみち彼、九州行っちゃうんでしょ？　遠距離なんて続かないよ」
「そうかな。まあでも、私の顔見るの辛いって言われちゃったし。彼にとっていいならよかったって思いたい……」
それを聞いて、裕子は突然身を乗り出してくる。
「そう言われたの？　顔見るの辛いって？」
「復唱しないでいただきたい……まだ立ち直ってないんだから」
俯いた私の肩を、裕子が思いっきり叩いた。
「痛い！」
「それ、望みあるかもよ」
「は？　何言ってんの。これだけハッキリとフラれたのに、それでも望み持ってたら、ただのストーカーじゃない」
私は苛立ってそう言った。
だが、裕子の顔は輝いている。
「モノによるけど、あんたのケースは望みがある！　それに私、男

に言ったことあるのよ。あなたの顔見るのが辛いってね」
「ひどい女だね……」
「その先があるの。あなたの顔見るのが辛い、だってこれ以上いたら、あなたのこと好きになりそうだから……」
裕子が言うと計算高く聞こえ、嘘っぽい。でも、確かに私にも望みが見えた。
「それって……」
「もちろん私は計算して言ったの。相手が妻子持ちで、取引先の重役っていう面倒臭い男だったから。でもあんたの場合は違うでしょ。少なからず、向こうだって好意持ってたと思うし」
「そうかな……」
「少しは自信持たないと、前へは進めないよ。あんた小学校の時だって、彼に行動しなかったんでしょ？　もう偶然なんてないかもしれないよ。二度と会えないかもしれないんだよ？」
「……うん」
励ましてくれる裕子に、私の心は少しずつ動かされていた。
自信過剰でもいい、もう一度だけ、彼に伝えなければならないことがある。
「あんたが話さないから、彼の家族がどうなってるのかはわからないけど、いくら彼が家族を想って大事にしてたって、彼が拒否ったって、あんたの恋はあんただけのものなんだよ？　ちゃんと行動しないと、いつかきっと後悔するから」
殻が破れた音がした――。
裕子の言葉に、私は今まで悔いてきた人生を思い出したのだ。
彼のことに限らず、自分から進んで何かを手に入れようとしたことがない。戦ったこともない。それらはいつも後悔しつつも、改善されることはなかった。
「ごめん、裕子。私……帰るね」
突然の行動に、裕子は驚きながらも、私を笑顔で見送ってくれた。
私はそのまま彼の家を訪ねた。

10、私の恋・彼の愛

私はそのまま彼の家を訪ねた。

「住友さん……」

彼の家は数日前とは打って変わって、殺風景になっている。

「あ……ごめんね。昨日の休みに業者が入って。ほとんどの物無くしたから、人を呼べる状態じゃないんだけど……」

そう言いながらも、彼はどうぞと招き入れようとしてくれている。

私は首を振って、彼を見つめた。

「あの……こんなことといっても、また困らせるだけだと思う。でも、もう後悔したくないの。最後だから聞いてほしくて……」

玄関口で立ち止まったままの切羽詰まった私に、彼は怪訝な顔で頷く。

「うん……」

「……小四の時、あなたが転校してきた時から好きでした。梶君は私の初恋なの……もう会えないと思ったけど、再会した時、苗字は違ってもすぐわかった。梶君はまた遠くへ行ってしまうけど、もう偶然があるかはわからない。だから伝えさせて」

私は深呼吸して、もう一度口を開いた。

「家族のこと、忘れなくていい。私に背負わせてとも言えない。でも、私はあなたのことが好きだから……何か困ったことがあったり、人恋しくなって、誰かと遊びや飲みたくなったりしたら、声をかけてください。友達同士でもいいから、これからもずっと連絡し合える仲でいたいの」

次の瞬間、私は何がなんだかわからなくなった。

気がつけば、彼に抱きしめられている。壊れるくらい、強く……。

「……僕は家族のことが忘れられないんだ。忘れちゃいけないんだ。新しい恋に踏み切ることも、家族への裏切りだと思ってる。僕は……子供の頃、転校ばかり繰り返していて、人と深く付き合うことも

してこなかったと思う。だから今回も、辛くはないと思ってた。だけどなんでだろう……住友さんに会えないと思うと、寂しい。家族を失った時みたいに、闇に呑まれそうで怖いんだ……」
彼の目から、大粒の涙が零れ落ちた。
どれだけの我慢を強いられてきたのだろう。どれだけの重みを背負い、どれだけの痛みを、一人で抱えてきたのだろう。
想像すら出来ないほどの絶望を抱えた彼に、ちっぽけな悩みしかない私がしてあげられることはない気がした。
私は同じくらい強い力で彼を抱き返すと、子供のように彼の髪を撫でた。
「好きだ……」
やがて、彼がそう言った。
どのくらいの間、抱き合っていただろう。私たちはもつれるように、気を失うように、玄関先に倒れ込んだ。
「梶君……」
見つめ合う目は、どこか暗く寂しい。まるで彼は、決して許されない罪を、たった一人で背負っているかのようである。
「……やっぱり駄目だ。手放しで君を好きにはなれない。なっちゃいけないんだ」
言い聞かせるように、彼は目を伏せてそう言った。
私は静かに頷き、彼から離れた。
「奥さんはどんな人？　死んじゃっても、好きな人の恋を許せないくらい、嫉妬深い人なのかな……」
ぼそっと言った私に、彼は顔を上げる。
私にとっては、意味のある言葉ではなかった。ただの疑問である。だが彼には、私の向こうに、生きている奥さんの姿が見えるようだ。
「……そんなことない。きっと笑って祝福してくれる。私のことばかり考えず、幸せになれって。そういうやつだから……」
壁に寄りかかったまま、彼は顔を真っ赤にして泣き崩れた。

彼の奥さんは、きっと素敵な人だったんだろう。明るくて優しくて、誰よりも彼を愛していたんだろう。いつか見た写真からも、そんな人柄が伺えた。

それから私たちは、何をするでもなくそこにいた。
時に手を握り合ったりはしたが、言葉を交わすこともなく、抱き合うこともなく、私たちは玄関先の廊下に座り込んだまま、ただ茫然と朝を迎えるためだけに、そこにいた。

「住友さん……」
いつの間に眠っていたのか、私は彼の声で目が覚めた。
「あ……お、おはよう」
「おはよう」
彼はいつもの笑顔で、私を陽だまりのように包んでくれる。
「いつの間に寝ちゃったんだね……」
「僕も。ごめんね、こんなところに寝かせて……風邪引いてない？」
「うん、平気」
そう言ったものの、喉には痛みがある。でもそれを悟られまいと、私は立ち上がった。
「今日もいい天気」
玄関口に差し込む光に、私は目を細める。
「……今日も仕事だよね」
彼が尋ねた。
彼は昨日で退職したので、もう出勤することはない。
「うん。もう行かなきゃ……」
腕時計を見て、私はそう言った。
「ごめんね……」
「ううん、私のほうこそ。いろいろ……困らせてごめんなさい」
そう言いながら、私は靴を履いた。そして彼を見つめる。
なんだか清々しい気持ちでいっぱいだった。彼に思いを告げたこ

と、少しは伝わったと実感出来たことが、素直に嬉しい。
「……気を付けて」
「うん。じゃあ、また……」
「うん、また……」
それ以上、何も言うことが出来なかった。

11、最初で最後のラブ・レター

その日の昼、私は裕子にランチを奢りながら、昨日の報告をした。
「へえ。一夜を共にしたと？」
裕子は私の恋バナに、からかうように目を細めて笑う。
「変な言い方しないでよ。何にもしてないんだから」
「何にもしてないほうが変でしょ。でもまあ、奥手なあんたがよくやったよ……よかったね」
「うん」
正直なところ、今後のことは見えない。彼が何を考えているのかも、どうあがいても私を受け入れられないかもしれないことも、まったく見えない。
でも、私は私の恋を今度こそ大事にし、全うすることを決意した。

夕方、私は不安を抱えながらも、もう一度彼の家へ行こうと決める。
それが独りよがりで、嫌われたとしても、会わなければ前へ進めないと思ったのだ。
だがその勇気は、会社を出た途端いらなくなった。
「おつかれさま」
目の前には彼がいる。いつものような、陽だまりの笑顔で――。
「どうして？」
私は思わずそう言って、彼に駆け寄った。
すると、彼は一通の手紙を差し出してきた。
「え？」
「口にするの下手なんだ。だから手紙にしてきた。あとで……僕がいなくなったら読んで」
少し辛そうにしながら、彼はそう言う。
フラれることを予感して、私は小さく頷いた。

「うん……」
「僕、これから九州へ向かうよ。今まで本当にありがとう」
「梶君……」
「たくさん愛をありがとう。僕は……やっぱり亡くなった家族のことが忘れられない」
私は頷くことしか出来ない。
「忘れられないけど、あいつは許してくれると思う……まだ僕の中でケリがつけられない部分があるけど、全部納得して、全部思い出になったら……ちゃんと君に恋してもいいかな？」
プロポーズのように、嬉しい言葉だった。
「お、お願いします……」
私の返事を聞いて彼は微笑むと、そっと私を抱き寄せ、そして離れた。
「心機一転、頑張るよ。落ち着いたら連絡するから……待っててほしい」
私は何度も頷いて、止め処ない涙を拭う。
「待ってる……私もこっちで頑張るから。だから元気でいてね」
「うん。じゃあ、行くよ……」
「うん……」
名残惜しさを振り切って、彼は私に背を向けた。
私はその姿が見えなくなるまで、目で追い続ける。
やがて本当に見えなくなった。
「そうだ、手紙……」
涙を拭いながら、私は握っていた手紙を開けた。思わず握りしめていたため、くしゃくしゃになっている。

“住友彩香様
まっすぐな君の気持に応えられない、不甲斐無い僕を許してくだ

さい。
僕にはまだ、家族のことが過去に出来ません。今もふっと帰ってくるような、そんな気さえしています。
僕は良い夫・良い父親ではなかったかもしれないけれど、妻と子供を愛していました。それが突然いなくなるということは、心を失くしたも同然です。

ふと気が付いたけれど、子供の頃、転校ばかりを繰り返してきた僕にとって、この状態は同じだったのかもしれませんん。
新しい学校に慣れようと、無理して笑ったり、軽い人付き合いばかりをして、深く人と付き合ってこなかったあの頃と、今は似ています。
だから君が真っ直ぐに手を差し伸べてくれても、僕はどこか引いてしまったり、嘘ではないかと疑ってみたり……失うのが怖い、臆病者です。

今日、家族の墓参りに行ってきました。
あそこへ行くと、本当に自分は一人なのだと痛感させられます。
でも住友さんに出会って、僕の心は少なからず軽くなっていました。本当にありがとう。

今は手放しで受け入れることは出来ないけれど、今度会う時は僕が恩を返す番だと思っています。大切な家族以上に、君を大切に思えるように、僕は君のことを、そして家族のことを、きちんと整理して考えたいと思っています。

支離滅裂な文章ですみません。
落ち着いたら連絡します。それまでどうか、お元気で……。”

吹きさらしの街で、私は彼の手紙を食い入るように見つめていた。
やがて、気を落ち着かせるように、私は丁寧に手紙を封筒にしまう。
その時、便箋の裏にも何か書かれていることに気がついた。
“追伸。あの頃……学校で、消しゴム借りたことあった？”

ドキッとした。
私と彼の、二人きりの唯一の思い出。そして初めて交わした言葉を、彼が覚えていたなんて、夢ではないかと思った。
彼から勇気をもらったように、私は遠い空を見上げた。
私は、彼からたくさんのものをもらった。勇気、希望、絶望まで……。
私は彼に、何がしてあげられるだろう――。

彼が九州へ行って間もなく、私たちが作った子供服のサンプルが出来上がってきた。その段階から関係者には人気で、すぐにでも売り出そうという声まで上がったのには、鼻が高い。
それからしばらくして、私は彼にメールを出した。
手紙で返したかったのだが、彼の新しい住所は知らない。前に聞いていたメールに、仕事のこと、将来のこと、そして子供の頃、確かに消しゴムを貸したよ、と書いた。他愛もない話のほうが、彼も気楽に返事してくれると思ったのだ。
だが、彼からの返信はまったくなかった。
どこかエラーで届いていないのかとも思い、あれから何度かメールをした。でも返事が返ってくることはなく、いつしかメールアドレスも、電話番号すらも変わった事実を知った。
もう、会うことはないかもしれない。でもどこかで、“待っててほしい”と言った彼の言葉を信じている自分がいる。

「もういい加減、諦めなさいよ。連絡も取れない男に縛られる権利ないでしょ」
裕子はそう言った。
私もそれはわかっているものの、自分の意思すらコントロール出来ない。
新しい恋愛を無理にしようとした時期もあったが、結局彼を忘れることは出来なかった。

12、薄桃色のメモリー

春――。薄桃色の桜が満開に咲く。
この季節になると、私は彼を思い出す。
あれからもう、五年の歳月が過ぎた。

「これで終わりですか？」
その言葉に、私はビクッとして振り向いた。目の前には、引っ越し業者の青年がいる。
私は我に返り、頷いた。
「あ、はい。そうです」
「じゃあ新居に向かいますね」
「お願いします。私もすぐ向かいますので」
そう言って、私は空になった部屋を見つめる。
五年間、立ち止まっていた想い。今も忘れることなど出来ない自分がいるが、私も彼のように、新しい場所で心機一転頑張ろうと考えたのだ。
会社は変わらないが、私も係長という役を任されるようにまでなり、ただ仕事をこなすだけの毎日を送っている。五年前、彼と出会う前の、機械的な私に戻っただけのことだ。でもそれは、どこかで寂しく感じる。
同期の裕子は、三年前に結婚退職した。恋愛話一つない私には、会社でお局様のような存在になっているに違いない。
その日、新居に荷物を運び入れ、私は会社へと向かった。
もちろん今日は休みを取っているが、家で読んでおこうと思っていた資料を忘れていたので、取りに行こうと思ったのだ。
「わあ、綺麗な桜。満開ね」

そんな声が、どこからか聞こえた。
会社の横は桜並木で、この季節は観光名所のように人が訪れる。
「あれ、住友さん。今日、引っ越しじゃないの？」
部署に入るなり、部長がそう声を掛けてくる。
「ええ。でも運び込みは済んだんで、ちょっと忘れ物取りに来ただけです」
「忘れ物なんて、大丈夫？　これから老いていくだけだよ。オバちゃんまっしぐらだな」
「部長、それってセクハラですよ。それに、どうせ私はもうオバちゃんですから」
部長のチクチクとした言葉には、もうすっかり慣れている。
私は苦笑したまま、自分のデスクから、いくつか資料を取り出した。
「そうだ。休みに悪いんだけど、これ直しておいてくれないかな。もちろん今日じゃなくていいけど、近いうち」
頼みといっても強制的で、すでに部長はファイルを差し出している。
「直しですか？」
ファイルの中を見ると、いくつかデザイン画が入っている。だが、悪いが雑なデザイン画だ。
「今度の新入社員に描かせてみたものなんだけど、ひとつ見繕って直してくれよ。こういう風に描けってね。まったく、専門学校出て学んでいるはずなのに、よくまあ雑にやってくれたよ」
部長に同意し、私は苦笑した。
早く帰って引っ越し後の片付けをしなければならないが、一人じゃそれも気が重いので、私はこの仕事をやってしまおうと思い、椅子に座る。
「じゃあ、やっちゃいますね」
「いいのかい？　引っ越しのほうは」
「ぐちゃぐちゃになってる部屋なんて、見たくないですもん。寝る

ところさえあれば、今日は乗り切れます。明日も休みなので、後片付けは明日やることにします」
「頑張るねえ。まあ、頼むよ」
部長は自分の席へと戻っていった。
私は新入社員のデザイン画を見つめる。最近の新入社員は、特に代わり映えしない。技術も才能も同じくらいだ。
彼が入ってきた時の新入社員は、みんな性格も良かったし、仕事に熱心だった。そして、まるで彼に触発されたかのように、今では才能を発揮している。他の会社に引き抜かれた子もいるくらいだ。
「はあ……」
私は溜息をついて、デザイン画に新しい線を入れていく。
気がつけば、なんでも彼と結び付けようとしている自分が嫌だ。根暗で、独りよがりで、これっぽっちも変わっていない自分に嫌気が差す。
絵を見つめながら筆記用具を探っていると、表に出していたペンなどを、豪快に落としてしまった。
「ああ……」
やれやれ、だ……最近、何もかもがうまくいっていない気がする。それが自分のせいだとわかっていても、簡単に受け入れたくはない。
椅子から立ち上がり、私は床にしゃがみ込む。
今日はほとんどの社員が休みなので、この醜態があまり晒されなかったことに感謝だ。
「消しゴム、貸してくれない？」
突然だった。
時が巻き戻るスイッチのように、その言葉は私の思考を刺激する。
「住友さん……」
不思議と、顔が上げられなかった。
何度同じ夢を見ただろう。顔を上げても、目当ての顔はそこにはない。
だけど突然の夢は、やけに生々しい声である。

私は床を見つめたまま、深呼吸をして、状況を思い出した。
遠くに部長が座っているほかは、今はこの部署に誰もいない。拾うのに一生懸命になっていたこともあるが、人の気配にまったく気付かなかった。
「大丈夫？　住友さん」
覗き込んできた顔で、私の目に人の顔が映る。
そこには、間違いなく彼の姿があった。いつの日と変わらない笑顔が、そこにあった。
「梶、君……？」
彼は頷くと、拾い上げた私の消しゴムを握り、私が直していたデザイン画の上に置く。
「よかった。まだここにいたんだね」
そう言う彼が、まだ本物なのか区別すらつかない。
私は腰を抜かしたように床に座り込んだまま、震える手を彼に伸ばした。
「本物だよ」
すべてを察するようにそう言って、彼は私の手を取る。
私は涙を流した。
「会いたかった……」
「……待たせてごめんね」
言いたいことはたくさんあったが、彼の一言で、私はすべてが満たされていた。
彼が帰ってきた。私のもとに……それは、二人の未来を示している。

やがて私たちは、会社の会議室で、二人きりで話をした。休日の今日、ここなら誰も来ないだろうからである。
そこで、彼が独立してこちらに事務所を構えること、私の前の家へ訪ねてから会社へ来てくれ、私を探そうとしてくれていたこと、そして、やっと過去に気持ちの整理をつけられたということを教え

てくれた。
「僕はこれからも、前の家族と君を比べることは出来ないと思う……この五年の間で、君が結婚したり幸せでいるなら、それを見届けようと思って来た。でも、君が僕を許してくれて、まだ少しでも僕を想っていてくれたなら……これからずっと、一緒にいてほしいんだ」
プロポーズだった。
なんの準備もない、不意の告白……それでも私は、死んでしまうかと思うほど嬉しかった。
「はい……」
私たちは、そこで初めてキスをした。
話したいことがたくさんあるのに、言葉が見つからない。それでも、わたしたちはもうわかり合えている気がする。
暖かなそよ風が吹き抜け、会議室の窓から桜の花びらが迷い込む。
春の訪れとともに、彼は私の前に現れた。
ほろ苦い思い出を、胸いっぱいに詰め込んで――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3864i/

薄桃色のメモリー

2010年10月8日11時53分発行